

「目がさえぎられている」

～復活の朝に生きる メタノイヤの道7～

ルカ24：13～32

■ 私たちの目線

私たちは何を見て、判断をして、行動につなげているのでしょうか。ある団体が新幹線に乗っていました。その時、子どもたちが「なぜ新幹線は曲がるのか」という疑問がわき、考えていました。しかし大人がそれを「うるさい、だまれ」「ルールの上を走っているから当たり前」というような答えをしてしまっている光景がありました。子どもにとっては疑問がわき、それを自分で調べたり、考えたりする中で子どもにとって大きな夢や希望につながっていくことは理解できます。しかし目の前で話している子どもを見ると分かっていることと違うことをしていないのでしょうか。

■ エマオの途上の物語

2人の弟子がエルサレムから11キロ離れたエマオに行く道中の物語になります。12弟子ではない弟子たちも十字架にかかったイエスを見た後、散り散りになっていることが分かります。この2人はエルサレムには希望がないことを悟り、去ろうとしていました。そこに復活のイエスキリストが共に歩まれたところです。2人は目がさえぎられていたため、イエスご自身であることが認識することができませんでした。イエスキリストは2人のために救い主について旧約聖書に書かれている事柄から説明をしていました。そして夕刻になっていたので、宿泊しながら、親交を深めたいと思っていました。イエスがパンを裂いたところで目が開かれたため、イエスはその場を離れ、2人の弟子たちはエルサレムに戻っていきま

■ 現実主義

現実を最重視する態度。理想を追うことなく、現実の事態に即して事を処理しようとする立場のことをさしています。ですから主体は私たちにあり管理しているともいえます。では私たちは目の前に起こることをどのように捉えているのでしょうか。クリスチャンである私たちは誰に管理されているのでしょうか。現実主義とは管理するのが自分になっているので、その場合御言葉がいらぬ歩みができます。私たちは信仰主義で進んでいくことが大切です。

■ 2人の弟子

この登場した2人の弟子たちは現実に目が留まったままでした。聖書には目がさえぎられていたと書かれています。何によってさえぎられていたのかというと、それが現実主義というフィルターです。彼らの問答の中に、イエス=救い主が預言者としての理解に変わり、エルサレムですごいことが起こると信じていたのに罪人として死刑になってしまったという現実の中に生きていたからでした。その現実主義の2人からすると、そばを歩いてくれた方は威厳があり、知識もあり、自分たちのリーダーに相応しいと感じ、もっと一緒にいてほしいという行動でないかと推測されるような動きをしています。招きいれたにも関わらず、弟子たちがイエスからパンをもらっています。そしてこの時、現実主義的なフィルターがとれて、イエスキリスト=救い主が目の前にいた！ということに気が付きました。彼らは気づきました。イエスご自身と一緒に話している間も心の中が熱くなり、自分の本来の役割に再び戻る決意をし、行動していきま

■ 詩「金曜日が過ぎ、日曜日がくる」

金曜日、イエスは祈っていた庭で逮捕された。しかし日曜日が来る。金曜日、弟子たちは隠れ、ペテロは主を知っていることを否定した。しかし、日曜日が来る。金曜日 イエスはまるで殺される前の羊のように沈黙したままイスラエルの大祭司の前に立った。しかし日曜日が来る。金曜日、イエスは殴られ、あざつけられ、つばをかけられた。しかし日曜日が来る。金曜日、ローマの兵士たちは主イエスの肉体を金属と骨で出来た鞭の先で痛めつけた。しかし日曜日が来る。金曜日、人の子はイバラの冠を額に無理矢押し付けられ、もしっかりそこに立っていた。しかし日曜日は来る。金曜日、カルバリの丘に向かう主を見よ。その身体から血がしたたり、背負っている十字架の重さが彼の背中を痛めつけ、押しつぶされそうに

なっている。しかし日曜日が来る。金曜日、ローマの兵士たちが主イエスの手と足に釘を打ち付けている。主の叫び声が響く。「父よ、彼らをお救しください」これは金曜日。しかし日曜日が来る。

金曜日、イエスは十字架にかけられ、血まみれになり死んで行く。しかし日曜日が来る。金曜日、空は暗くなり、地は震えます。罪を知らない方が私たちのために罪となられた。聖なる神は罪を放置することが出来ず、「わが神、わが神、どうして私をお見捨てになったのですか」と叫び声をあげる完全な犠牲の上に、神の聖なる怒りをすべて落とされた。なんとという恐ろしい悲嘆の叫び。しかし日曜日が来る。金曜日、十字架での主イエスの死の瞬間に、罪ある人間と神との間のへだてと理解されていた 神殿の幕がまっふたつに裂けた。それはまさに日曜日が来るからなのだ。金曜日、イエスは十字架にかけられ、天では嘆きが、そして地獄では宴会が開かれていたに違いない。しかし、それは金曜日。彼らは日曜日が来ることをまだ知らない。2000年前、あの恐ろしいことが起こった。主イエス・キリスト、栄光の主、神のひとり子、ただひとりの完全な罪のない人が十字架で死なれた。悪魔は勝利したと考えたに違いない。神の御子を破壊したと彼らは考えたことだろう。エデンの園で預言されたあの言葉は実現しなかったと彼らは思ったに違いない。しかし、それは金曜日。そして日曜日。週の最初の朝早く、大きな地震があった。もちろん、それが日曜日の上ではなかった。天使がやってきて墓の石を動かした。日曜日が、来た。主の使いは石の上に座り、遺体が盗まれることを恐れて墓の番をしていた番兵は驚き逃げ去った。日曜日が来た。沈黙のうちに屠られるために引かれて行った子羊は、ユダ族のライオンとしてよみがえられた。み使いは、「その方はこちらにはおられません」と、語った。彼はよみがえられた。日曜日、十字架につけられたキリストはよみがえり、死と地獄と罪、そして墓を打ち破った。日曜日が来た。全てが、変わった。恵みの時代になった。誰でも十字架で死なれた神の子羊を信頼するなら神の恵みが豊かに注がれる。十字架で死なれたキリストが葬られ、よみがえられたと信じるなら神の恵みは無償で与えられる。日曜日が来た。今日はあなたにとって金曜日かもしれない。しかし、あなたの人生にもキリストがよみがえられた日曜日がきつと来る。

■ ① 目が見ているもの！！

私たちの目が見ているものをもう一度確認してみましょう。現実主義で見ているとは金曜日に留まっている状態です。そこから私たちは日曜日が来なければなりません。イエスが復活したように、夕があり朝があるので。私たちは現実から目を離し、イエスを信じることをしなければなりません。メタノイヤ（悔い改め）が語られ、自らを省みていると自分を責め、落ち込んでしまう人がいます。その人は金曜日に生きているのです。私たちは自らで日曜日を迎える決断をしなければなりません。

■ ② 現実→□(空欄)→神の計画！！

私たちはこの「□(空欄)」の中に何をおくべきでしょうか。どのようにしたら、神の計画として、目の前に起こっている事柄を見ることが出来るのでしょうか。すべての事柄が偶然ではなく、必然の中で行われ、神様の摂理で行われたことであると捉えていった場合、そこには神様の目で見ることによって神の計画へと見方を変えていくことができます。ダビデは「いつも私の目の前に主を置いた」と表現しています。現実から神の計画を感じていきましょう。

■ ③ イエス様の生き方方法

私たちは模範となる生き方を知っています。イエスキリストの行動です。イエスキリストは目の前に起こった事柄を見て、右往左往していったのでしょうか。自分を失っていったのでしょうか。ですからその場で現実主義で自分で管理し、自分で解決しようとするのを止めて、イエス様の生き方、方法でのぞまなければならないのです。そのために私たちは必要なところへ遣わされているのです。復活したイエスは人々のところに現される時に、「平安があるように」と声をかけました。私たちが心を騒がせず、主の平安の中を歩み、イエス様ならどうするのか(WWJD)を感じ、行動していきましょう。

(要約者:平澤 一浩)

(4月23日)